

序 文

日本人にとって、中国語は習得が容易だと言われる。また、中国人にとっても、日本語は他の言語よりも親しみやすいという。両方の言語がともに漢字を使っており、共通の漢字語も多いからだというのがその最大の理由である。ただし、日本語と中国語がこんなにも似てしまったのは、最近100年ほどのことである。語彙の面で日中両語が大きく似通うことになったのは、周知のように、西洋文明の導入に努めた明治日本において、西洋起源の多くの語句、概念に対応する訳語が、漢字語を駆使することによって編み出され、それが19世紀末から20世紀初めにかけて、中国へ流れ込んでいって定着したからである。

これを別の角度から見れば、明治における日本語の変化は、漢語を取り込む（新漢語を生み出す）ことと並行して進んだものだったため、中国語を含む同時代の東アジアの言語や、ひいては思考様式をも変貌させる結果を生んだと言ってもよいだろう。日本で生み出された翻訳語（新漢語）を取り入れたために中国で起こった事態を、中国近代学術史の大家たる桑兵教授は、「発漢音、説日語、用西思」と簡潔に言い表している。つまりは、中国人の口から発せられているのは確かに中国語の音だが、実はしゃべっている語彙は日本語なのであり、さらに言えばそれは——日本語訳語に仕込まれている——西洋型の思考方法にほかならないのだ、ということである。もって、日本経由の訳語が中国に如何に大きな影響を及ぼしたかが知れよう。中国は如何にして西洋の概念や思想を受容したのか、膨大な厚みと歴史を持つ中華文明は如何にして西洋文明という異なる文明体系に対応したのか、こうした極めて大きな問いに答えようとする時、日本（日本語）の媒介的作用を抜きにして説明が成り立たないのは、かく見れば当たり前のことなのである。

本論文集は、人間文化研究機構現代中国地域研究京都大学拠点（京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター）の研究グループ1「現代中国文化の深層構造」（研究代表者：石川禎浩准教授）の研究活動の一環として、2008年4月～2011年3月に行われた「近代東アジアにおける翻訳概念の展開」研究会（代表者：狭間直樹 京都大学名誉教授）の研究成果であり、上述した西洋起源の概念翻訳語（新漢語）の東アジアにおける展開の背景と意味を探るものである。

人文科学研究所では、かつて共同研究班「梁啓超の研究——その日本を媒介とした西洋近代認識について」が、狭間直樹班長のもとに開催されている。これは、多方面にわたる梁啓超の活躍のうち、かれが中国に注ぎ入れた西洋思想と明治日本の関係の解明に主眼を

においてなされた共同研究であった。1993年から4年間にわたって行われた研究班の成果は、論文集（狭間直樹編『共同研究 梁啓超——西洋近代思想受容と日本』みすず書房、1999年；中国語訳：『梁啓超・明治日本・西方』北京：社会科学文献出版社、2001年；2012年に修訂再版）の形で刊行されたほか、並行して共同研究班の有志が、島田虔次先生の指導のもとで『梁啓超年譜長編』の翻訳を行い、その日本語訳注本（全5巻）も2004年に岩波書店より上梓されている。

梁啓超を対象としてなされたこれら一連の研究は、梁啓超その人にかんする研究だけでなく、広く明治日本を媒介とした西洋思想の中国への伝播という研究分野を一挙に活性化させた。もちろん、それ以前にも日本漢語（日本語著作）の中国への影響が指摘されていなかったわけではない。だが、影響の具体相となると、おおざっぱに言えば、1980年代までの研究は、さねとうけいしゅう『中国人日本留学史』（増補版1970年）と譚汝謙『中国訳日本書綜合目録』（1980年）をもって、だいたいの論拠としていたと言ってよいだろう。

そうした状況を大きく乗り越え、日本の影響の具体相を明らかにしたのが、共同研究班「梁啓超の研究」だったのであり、その成果は果たして大きな反響を呼んだ。研究班に刺激を受けた仏・米の研究者（Marianne BASTID-BRUGUIÈRE, Joshua FOGEL 両氏）が関連する国際シンポジウムをそれぞれ1995年（フランス／ガルシー）、1998年（アメリカ／サンタ・バーバラ）に開催したのは、その直接的反響である。奇しくもほぼ同じ時期、西洋起源の語彙、概念、学説、言説の近代中国（東アジア）への伝播とその定着を扱う研究が、沈国威、リディア・リウ（Lydia Liu, 劉禾）、金観濤、鄒振環らの諸氏によっても鋭意進められ、注目をあびるにいたった。かくて、近代東アジアを対象とする「概念史」の研究は、今日の隆盛を迎えているわけだが、その端緒の一つは、共同研究「梁啓超の研究」であったといってもよからう。

今回我々が組織した「近代東アジアにおける翻訳概念の展開」研究会は、構想とメンバーについて言えば、その梁啓超研究班を部分的に引き継ぐものであるが、単なる続編ではない。先の研究班においては、梁が亡命先の明治日本で接した様々な近代西洋の学説、思想、概念の来源（日本書の藍本）が精力的に探索された。それに対して今回の研究会は、そもそもその日本でなされた西洋文明受容の過程を洗い直す（その中には、幕末期に伝来した西洋事情に関する中国書の影響も含まれる）ことも含め、東アジアの伝統的文明体系が近代以降の異文明との接触の中で、それへの接合をはかるといことはどのような文明史的意味を持つのかという点を解明せんとしている。もちろん、その過程に大きな足跡を残した梁啓超は、相変わらず重要人物ではあるが、日本も含め、東アジアの知識人が近代西洋を理解しようとした時、西洋文明のカギとなる概念、思想を翻訳しようとした時、かれらの旧来の知識や素養（その多くは儒教的なものだが）はどのような作用を及ぼしたのか、そこに日中の違いはどのように現れたのか、という思想史研究の問題意識がより濃厚に反

映しているのである。

その意味では、我々の研究スタイルは、ある語句、語彙がいつ最初に登場し、どれだけの頻度で使われたかを、近年充実の著しいデータベースを駆使して探るといった「語彙史」ではない。かかる作業は「国語学」「言語学」の領域において、高度なレベルですでになされておられ、我々のような史学研究者がその真似をしてみても、有益な貢献は期待できないからである。また、ある語句の最初の使用例を見つけることに、それなりの意義があることは言うまでもないが、私たちは字づらの一致のみで初期の事例だとするような短絡的結論を求めるのではなく、むしろ、ある翻訳語句（概念）が如何なる文化的・思想的背景から生まれ出たのか、それが日中で共有された場合も、異なる文化的、政治的背景のもとでは日中で偏差を伴って理解されたのではないか、さらにはそうした偏差を伴いながらも、総体としては近代西洋文明に対応的な、ある種の近代“東アジア文明圏”の如きものを形成したのではないか、という仮説にもとづいて研究を重ねた。

以下、この論文集に取められた12篇の論文について、簡単にその内容を紹介しておこう。

①近代西洋思想の極北たるルソー『社会契約論』とその翻訳（中江兆民訳『民約訳解』）をとりあげた狭間論文は、本論集の総論とも言うべきものである。『民約訳解』の特色は、それが漢訳であり、かつ当時なお不安定な状態にあった「新漢語」を使わずに訳することに成功したという点にある。漢語によってルソーを翻訳した兆民の意図を探る中で、狭間論文は、豊穡な語彙を持つ漢文で西洋思想を訳せないわけではないという自負が兆民にあったこと、さらに中国伝統思想（儒教）の良質な部分に君権拘束の本質があり、それを兆民がしっかりとつかんでいた点を指摘する。さらに、明治・清末にあらわれた『社会契約論』の各種翻訳を細かく検討することによって、当時におけるこの名著の理解のされようを具体的に提示してくれる。

②一つの名著が日本と中国で、翻訳の第一人者によってそれぞれ別個に翻訳された事例を扱うのが、ミル『自由論』を取りあげた高柳論文である。ただし、中村正直、嚴復によってなされた翻訳を単に比較検討したのではなく、中村、嚴それぞれについて、他の代表的訳業や著作との関係性、脈絡の中で、『自由論』の意味が問われている点に大きな特長がある。例えば、中村の『西国立志編』においては、旧来の価値観（つまり儒教型価値観）は決して否定されるものとはされていない点、また嚴復においては「救亡決論」に見えるような名教墨守に疑念を示すその姿勢が、それぞれの『自由論』翻訳の背景や目的をなしているという指摘は新鮮なものであろう。

③李論文は、近代の日中にとって、共に時代思想ともいうべき通念となった進化論（社会進化論）の位相をとらえたものである。嚴復の『天演論』が多くの清末人士にとって、社会進化論の最初の衝撃となったにも関わらず、関連訳著がその後の中国では刊行されな

かったため、「進化」系統の訳語、すなわち日本語文献の進化言説が清末から民国の中国語世界に及んでいったことを示し、特に日本における進化論紹介者の第一人者たる丘浅次郎の魯迅にたいする影響を、具体的事例を挙げつつ検証している。

④西洋伝来の翻訳概念の普及に伴い、東アジアの在来概念がいくつかの個別概念に分化、解体していった例としては「文学」が有名だが、その分化の様態を文法（文典）概念の発生と関わらせて論じているのが袁論文である。旧来の「文学」概念がいち早く解体した明治日本において、『文学書官話』（1869年）の影響下に生まれた文法学が、やがて形を変えて清末中国に環流していったさまは、翻訳概念の展開というレベルを超えるある種の東アジア文明圏での「知」の再編ドラマを見るかのようである。

⑤桑論文は、極めつけの西洋起源概念である「哲学」を論じ、それが中国の諸学を扱うのに適当な概念、範疇なのかという古く根源的な問題に、歴史学の立場から答えようとするものである。当初、西洋のそれに対して想定、使用された「哲学」なる概念が、東洋に対して用いられた時、すなわち「中国哲学」（支那哲学）の名辞が登場したことによって、中国の思想や諸学は西洋の「哲学」に対応するものに相貌を変えさせられてしまい、それ以来、中国固有の「学」にかんする語りは、西洋語「哲学」の桎梏から脱することができないでいる。こうした状況の発端となった明治日本における「中国哲学」の発生過程とその中国への影響に光を当てることで、桑論文は中国が如何にすれば自己の語りを取りもどすことができるのか、自問しているかのようである。

⑥周知のように、19世紀後半に登場した「新漢語」の多くは、日本と中国で共通のものだが、同一語なのに微妙な位相・価値観の相違を伴う概念も他方で存在する。そうした語として「記念」を俎上に載せたのが小野寺論文である。小野寺論文においては、その相違の理由として、日本の「記念」が和語「かたみ」の訓を持つものから脱皮して（いわば私の領域から公の領域へ）定着していったという歴史的背景が提示されているだけでなく、日中両語におけるニュアンスの違い（「記念」の対象がプラスの事績か、マイナスの記憶か）が、近代における両国の国勢の違いによって生じたことが解明されている。

⑦近代概念語といっても、それが国家間の関係を規定する国際関係用語となると、曖昧で恣意的な理解のままでは済まないはずである。「主権」「宗主権」は中国近代外交史上、まさにキーとなる概念であったが、岡本論文が明らかにするその言葉の揺らぎ、特に「主権」の語の形成と意味変容は、チベットをめぐるイギリスとの間で行われた概念戦とも呼ぶべきものの結果でもあった。その概念戦の中で、字づらは同じ「主権」が、「宗主権」とほぼ同じ意味からそれを明確に否定する意味へと変容していくのだが、それは中国が sovereignty に対応するものとして「主権」を再措定し、それをこれまた新概念たる「領土」と組み合わせることによって可能となったのであった。

⑧近代東アジアの知識人がその訳語創出に苦労した西洋語は多いが、その中には当の西

洋においても生成の過程のただ中にあり、かつまた西洋諸国の間で異なる背景を持っていた概念もある。武上論文が扱う「civil engineering」はそうした語の一つである。この語は紆余曲折を経て、一応「土木」という訳語の定着を見るわけだが、それ以前にも「済世の器械を作ること」など、近代西洋の価値観を体現する語のひとつ「civil」をアジア在来概念とすり合わせようとする試みもなされていた。またこの論文は、概念語訳語研究の正道である各種辞典の詳細な比較検討によって、訳語定着の過程を明らかにしているのみならず、その「土工学」なる学術領域が、近代日中の社会においてどのような位置を占めるものだったのかにも言及している。

⑨森論文は、戊戌変法期の梁啓超を中心に、political economy が如何なるチャンネルを通じて中国に受容されたかを、『富国策』『富国養民策』『佐治芻言』の三種を中心とし、幕末明治期の日本との比較を通じて論証したものである。そのさい、political economy の中味が同時代西洋においても多様であったことへの指摘は重要である。つまり一口に political economy の概説書とはいっても、それがいかなる学派の経済学を略述するのかによって、読み手のその学への理解は全く異なってしまうからである。その一例として、森論文は、自由貿易論が梁啓超によって公羊派の三世説と附会して読まれたこと、つまりは変法派の立場に正当性を与えるような理解のされ方があったことを明らかにしている。

⑩石川論文は、西洋型知識体系を具現する書物である「百科事典」について、日本と中国でそれぞれ最初に「百科全書」を冠して刊行された書物を比較したものである。日本のそれ（1873～1883年にかけて刊行）は英語版の簡易型百科事典の全訳、中国のそれ（1903年刊）は日本語書籍の抄訳からなるものだった。両者の刊行に夾まれた二、三十年の間に、日本では新漢語の翻訳概念が形成、定着し、それが20世紀初頭に中国語世界に流れ込んでいくわけだが、石川論文は「百科全書」を素材として、その過程を東アジアにおける言語のデファクト・スタンダードの確立と考える視点を提示する。

⑪高嶋論文は、近代中国へのレットル「東亜病夫」が、なぜ個々の中国人の身体性を指すものに転じ、それゆえにスポーツによる個々人の身体鍛錬という、一種奇妙な読み替えによる解決策に帰結したのか（あるいは、そのような読み替えがあったとすれば、それはいつ始まったことなのか）という問題を、近代における男性性（masculinity）の視点を援用しつつ分析したものである。男性性がとりわけ植民地的文化磁場の中で顕在化する事象であることに注目したこの論文は、中国近代における「スポーツ」の発祥の地ともいべき上海のセント・ジョーンズ学校を素材に、中国在来の「文」の男性性が「武」（スポーツ）をはじめとする別の男性性にとって代わられていく過程を詳述している。

⑫近代東アジアの翻訳概念といえば、日本経由で中国、朝鮮に流入した例が多いが、社会運動、共産主義運動関連の語句について言えば、ソヴィエト・ロシア起源の概念が中国から日本に及んだ事例のあることは、見過ごされがちである。江田論文は、「路線」とい

う政治世界の概念が、実はそうした事例の一つであることを解き明かしている。言うまでもなく、共産党の革命運動においては、中国の方が日本よりも強くソ連の影響を受け、党派性やレッテルにまつわる言葉については、中国で先に漢語訳が形成されるということがあったためである。

以上、極めておおざっぱに各篇の内容を要約したが、むろん要約では書ききれぬことも多く、それら論文の真の価値は各篇について直に読んでもらうしかない。また、全篇を通じて、本論文集がはたして冒頭で掲げた課題への回答となっているか否かは、読者諸賢の判断にゆだねたい。

研究会に参加された方の中には、諸事情によりこの論文集に寄稿されなかった方もおられるので、3年間のべ27回にわたった研究会例会（基本的に毎月1回、土曜の午後2～5時に京都大学人文科学研究所現代中国共同研究室で開催）の報告者、報告題目を以下に掲げる。

2008年

- 4月12日 狭間直樹「梁啓超と譚嗣同・康有為および日本人——梁啓超の思想と倫理の位相」
- 5月10日 桑兵「概念與事物：“中国哲学”在近代中国」
- 6月14日 石川禎浩「“睡獅”・梁啓超・フランケンシュタイン——戊戌時期の西洋情報：知らないものを如何に想像するか」
- 7月11日 関暁紅「知識與制度：清季的“地方”問題與憲政改革」
- 8月 9日 岡本隆司「大君と自主と独立——近代朝鮮をめぐる翻訳概念」
- 9月13日 森時彦「西洋近代経済学と変法派——梁啓超を中心に」
- 10月11日 川尻文彦「近代中国における「文明」——梁啓超の「文明」理解を中心に」
- 11月 8日 高柳信夫「中国近代思想史における「科学」と「道德」——嚴復の議論を中心として」
- 12月13日 高嶋航「スポーツと「翻訳」」

2009年

- 1月10日 銭鷗「一些突然消失的概念——読解王国維・思考中国近代批判理性」
- 4月11日 狭間直樹「近代東アジア文明圏の形成における「和製漢語」の役割——『万国公法』の翻訳を素材として」
- 5月 9日 小野寺史郎「「民族主義」と梁啓超」
- 6月13日 袁広泉「中華民族論構築に於ける梁啓超とその周辺」
- 7月11日 武上真理子「孫文訳『紅十字会救傷第一法』に関する一考察：「西学」と「東

学」の受容をめぐって」

- 9月12日 江田憲治「翻訳概念としての「帝国」」
- 10月10日 川尻文彦「『新民叢報』停刊の周辺——梁啓超と「立憲」」
- 11月14日 石川禎浩「党派的政治言語の近代——“左”・右・路線」
- 12月12日 岡本隆司「夷務と洋務と外務——その転換期を中心に」
- 2010年
- 1月 9日 高柳信夫「清末民初における“個性／individuality”概念の検討のための初歩的整理」
- 4月10日 狭間直樹「近代“東アジア文明圏”の形成と西周」
- 5月 8日 李冬木「翻訳概念“天演”から“進化”へ：魯迅の進化論の受容とその展開を中心に」
- 6月12日 宮島達夫（ゲスト・スピーカー）「東アジアにおける近代語彙史研究の若干の問題」
- 7月10日 高嶋航「翻訳の力学：「東アジア“文明”圏」におけるスポーツの翻訳」
- 12月11日 江田憲治「中国共産党史における翻訳概念：“路線”と“コース”をめぐって」
- 2011年
- 1月 8日 小野寺史郎「翻訳文化としての“記念日”」
- 2月12日 武上真理子「“engineering”, “civil engineering”の翻訳について：東アジアにおける近代技術史のプロローグ」
- 3月12日 袁広泉「明治期における日中間文法学の交流：西学東漸を背景とした「文学」の解体と「文典」の困惑」

さらに、この研究会の例会拡大版として、2010年2月27日には国際ワークショップ「近代中国における翻訳概念の展開」を開催した（於 京都大学人文研 報告者：ゴテリンド・ミュラー＝セイニ [Gotelind MÜLLER-SAINI、ハイデルベルグ大学教授]、趙立彬 [中国・中山大學教授]、森時彦 [京都大學教授]）。その報告書（『国際ワークショップ「近代中国における翻訳概念の展開」』京大人文研石川研究室、2011年5月発行）は、PDF版でオンライン公開されている（<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~rcmcc/workshop2010.pdf>）。また、この研究会の中間的成果として、五人（狭間、桑、森、石川、岡本）の論文（英語）が、東方学会の英文紀要 *ACTA ASIATICA* (No. 102, Feb. 2012) の特集誌面（The Modern West and the Establishment of an “East Asian Sphere of Civilization”）をかりて発表されているほか、研究資料整理の成果物としては、狭間氏が宮原佳昭氏の協力を得て作成した西周「百学連環」データベースがあり、人間文化研究機構の学術統合データベース事業（nihuINT データベース <http://int.nihu.jp/>）において公開されている。このほか、研究会・ワークショップ

プに、コメンテーターなどの形で参加して下さったのは、陳力衛、松尾洋二、岩井茂樹、金世昊、汪朝光、馬駿、箱田恵子、中島勝住、李長莉の諸氏である。

本書に収録した12篇の論文は、狭間直樹氏と石川禎浩が査読をおこない、武上真理子氏に入稿にさいする原稿の体例統一を担当していただいた。本書に収めるすべての論文については、本書の刊行後にそのPDF版を人文研現代中国研究センターのウェブサイト上に公開する予定である。本書の出版には、人間文化研究機構による現代中国地域研究推進事業（京都大学との共同事業）のプロジェクト経費を使用させていただいた。2012年4月より第二期に入ったこの現代中国地域研究推進事業のもと、我々京都大学拠点は「中国近現代史の重層構造」をテーマに掲げ、長いタイムスパンで現代中国をとらえることを目指しており、今回のこの研究会も言ってみれば、中国文明と西洋文明の交渉過程を近代100年のタイムスパンで見るというアプローチにはかならない。人文学のかかる基礎研究にたいする人間文化研究機構の支援にたいし、あらためて厚く御礼申し上げるとともに、このプロジェクトが今後さらに息長く継続されるよう願ってやまない。

2012年8月31日

京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター

石川 禎 浩